平成28年3月2日(水)

中日新聞(夕)11面

復興アイデア 学生目線

観光振興策を考えるため島の漁師らに話を聞く学生たち＝宮城県気仙沼市で

「緑の真珠」と呼ばれる美しい島として知られ、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県気仙沼市の大島で、東海地方の大学生たちが観光産業の復活に一役買っている。2月下旬には愛知、岐阜、三重の16大学の34人が現地入りし、島民もめったに訪れない岬を恋愛スポットとして売り出すことなど、若者目線の観光振興策を提案した。（立石智保）

東日本大震災 5年

東海地方の大学から、観光の島へ

気仙沼大島　気仙沼湾に浮かぶ、東北地方で最も人口の多い島。漁業と観光が主な産業で人口は2700人。東日本大震災の死者・行方不明者は31人。津波のほか、重油漏れで気仙沼湾に広がった火事が燃え移り、森林や亀山のリフト施設を焼くなどの被害が出た。気仙沼港からフェリーで約30分。

学生らは二月二十六日夜にバスで名古屋を出て、三泊四日で訪問した。八グループに分かれて島を散策、島民との意見交換会では「セグウェイで島を巡れるようにする」「交流の機会を増やすため『島の人に聞いてみてね』という看板を設ける」などの案が次々に飛び出した。

愛知教育大四年の市川真基さん(二二)＝愛知県刈谷市＝らのグループは、急な坂を上ってたどり着く岬「地獄崎」を訪問。「苦楽を共にする結婚を象徴するかのような険しい道を乗り越えた先に絶景が広がる。ここでプロポーズをすれば成功は間違いない」と恋愛スポット化を提案した。

大島は、島内を一望できる標高二三五㍍の「亀山」を登るリフトが震災で使用できなくなったほか、津波で海岸の砂浜が狭くなるなど大きな打撃を受けた。気仙沼大島観光協会青年部会長の村上盛文さん(四二)は「宿泊客は震災前の三割ほど」と明かす。二〇一八年度には本州と島を結ぶ橋が開通予定で、日帰り客の増加により宿泊客がさらに減る恐れがあるという。

今回の訪問は、名城大で学生向けの大島ツアーを企画してきたグループの代表で同大三年の山口春菜さん(二〇)＝名古屋市瑞穂区＝の呼び掛けで実現。名城大は卒業生が気仙沼市の職員を務める縁で、大島の支援を続けている。

名城大の学生たちはこれまでに計十六回、大島を訪れており、一四年には亀山の頂上に向かう「日本一長い直線階段」の整備などを市に提言。スマートフォンを使ったスタンプラリーなど、既に実現したものもある。今回初めて、岐阜聖徳学園大や三重大など他大学の学生が加わった。

学生自身の防災意識を高めることも、現地を訪ねる大切な目的の一つ。被災地を初めて訪れた愛知淑徳大三年の後藤裕喜さん(二〇)＝愛知県豊橋市＝は、民家の土台だけが残る光景にショックを受けた。保育士を目指しており「紙芝居で地元の子どもに震災のことを伝えたい」と話した。

青年部会長の村上さんは「自分たちでは気がつかない魅力を発掘してくれた。大きなヒントになる」と感謝。「大島の現状や震災のことを多くの人に伝えて」と学生たちに呼び掛けた。

初等音楽選修 4年